

## 国際化の中の個性

理事長 廣 田 勇

科学の世界に限らず、社会全般における近年の特徴のひとつは「国際化」にあると言えるでしょう。新聞やテレビでも「グローバリゼーション」などという言葉がごく普通に使われています。このような雰囲気をもたらした背景には、衛星通信やインターネットに代表されるいわゆる IT 技術の浸透、旅客機の普及大衆化、などが挙げられるでしょう。ふらんすはあまりに遠し、と朔太郎が嘆いたのは大正時代の終りのこと、いまや海外旅行など庶民にとってごくありふれた楽しみになっているのは、お正月休みの成田空港の混雑ぶりからも容易に想像できます。

昨年(2001年7月)にオーストリアのインスブルックで開かれた IAMAS (国際気象学大気科学協会) の第 8 回研究集会は、まさに我が国気象界の国際化を象徴する学会でした。全体の参加者約 1,000 名のうち、米国からの二百数十名に次いで日本からの参加者数は百名近くに達し、しかもそのほぼ三分の一が大学院生を含む二十代から三十代前半の若手研究者で占められていたことは従来に見られなかった画期的な出来事でした。

たとえばこれを、30年ほど昔の第 1 回 IAMAP 研究集会(於メルボルン)のときと比べてみると、当時の日本からの参加者は、日豪間の距離の近さにもかかわらず、総数 500 余名に対し僅か 13 名に過ぎませんでした(天気 21 巻, 1974 年 6 月号参照)。したがって、我が国からの参加者は気象学各分野の指導的立場にいる者のみに限られていました。

このように、現在、若い人々が海外で開かれる様々な国際学会や夏の学校などにかかなり自由に出席できるようになったのは、航空運賃の低価格化に加え、学術振興会の PD・DC を含めた科学研究費が国外旅費にも使えるようになったこと、気象学会国際交流委員会からの出席旅費補助があること等々、いくつかの理由が考えられますが、それにも増して、国外と国内をこと

さら区別する意識が薄れて来ていることの現われなのでしょう。国際語(英語)を自由に話せるまでの壁は依然として高いにしても、読み書きのハンディは少ないので、英国や米国の学会誌、たとえば QJRMS, JAS あるいは JGR などに印刷発表される日本の若手研究者の論文数が近年急増してきているのも我が国気象界の国際化を示す良い指標と言えます。

誤解のないように付け加えておくと、これは欧米の学会誌が日本気象学会の気象集誌(JMSJ)よりレベルが高い、などという意味ではありません。夫々の研究テーマにふさわしい発表の場が国際化しているということなのです。その証拠に、最近 JMSJ もそのテーマによって国外からの優れた投稿のあることは確かな事実です。

しかしながら、気象界の国際化の本当の意義は難しい問題を多々含んでいることを忘れてはならないでしょう。単に国際学会の出席者数や外国雑誌に載った論文数の多いことだけを喜んでいても意味はありません。それはあくまでもひとつの目安に過ぎません。大切なのは国際的な研究の場で発表される成果の内容、質の高さであるはずで

言うまでもなく「国際化」とは決して「世界の一律化」を意味するものではありません。むしろ、各国の様々な歴史的背景を持った個性・独自性のある研究成果を国際学会の場で発表し合い相互に切磋琢磨を図ることこそ真の意味の国際化であろうと思われます。

もちろん、気象学の研究に話を限っても、たとえば種々の衛星観測に代表されるような国際協力や大型プロジェクトでは、目的・手段ともいくつかの国が共同して同一のテーマに取り組む必要があります。つまり「世界の国々から皆でアイデアを持ち寄り力を合わせてひとつの目標を達成する」ことの意義はそれなりに存在します。いわゆる地球環境問題や気候問題に限らず、地球の大気は本来ひとつながりのものですからそれはある意味で当然のことと言えるでしょう。

だがしかし、学問の本質はあくまでも個々の研究者

の個性・独自性に立脚したものでなければ魅力的ではあり得ません。国際化と国際一様化とが混同された結果が没個性化につながり、世界中の誰もが同じデータセットに頼ったり類似のGCMを扱ったりしているだけでは研究の本当の面白さなど生まれてくるはずがありません。技術は均一性をもって良しとするのに対し、科学は独創性をもって価値が認められるものです。

少し厳しい言い方をするなら、国際学会の場に出てゆく若い人々が、自分の研究テーマに関して、欧米諸国でいま盛んに行われている内容と同じであることに安心したり満足したりするような安易な態度は取ってもらいたくありません。同様に、現在指導的責任のある立場にいる人が国際協力事業の名のもとに海外でのビジネスミーティングに出席することばかりに追われ、肝心の自分の研究や学生の指導がおろそかになったりするような本末転倒にならぬよう、常に自戒が必要でしょう。その意味で、我が国の気象界の優れた先達が、過去、国際的にはむしろ交流の限られた状況の

中で極めて個性的独創的な研究成果を世界に向けて発信してきた歴史を、あらためてもう一度振り返ってみるのも大切なことと思われます。

一昨年の本誌巻頭言では、「議論の意味を考えよう」と題して学問研究における思想の重要性を強調しました。指導的立場にいる方々もこれから研究の第一線に立ち向かってゆく新進の人々も、ともに等しく、時代の風潮に流されることなく、学問の国際化の真の意味を真剣に考えていただきたいと願うものです。

今から一年半後の2003年の夏には、札幌でIUGG(国際測地学地球物理学連合)の総会が開催されます。その一環としてのIAMASも新しい研究成果発表の場となるはずですが、しかし繰り返して言うなら、IUGG-IAMASは、もはや、かつてのオリンピック大会のような「参加することに意義がある」だけの集会ではありません。これをひとつの契機として、我が国気象界の新世紀を担う若い世代の中から個性豊かな優れた研究成果の生まれてくることを強く期待したいものです。